油屋熊八を深く知るための資料について

秦　広之

一　はじめに

油屋熊八は明治時代の末に別府を訪れ、旅館経営者として事業を展開しつつ別府の観光宣伝や大型バスによる地獄めぐりを始めるなど「別府観光の功労者」「別府観光の父」と評され市民に親しまれている。

油屋熊八の別府観光や宣伝への貢献については、存命中から高く評価されていたが、その功績については昭和二十七年（一九五二）に当時別府市図書館長を務めていた兼子鎮雄によりまとめられ（兼子鎮一九五二）、熊八に関する多くの情報を提供している。その後は、伝記・評伝・小説と様々な形で紹介されている。

本稿では、油屋熊八について深く知るために、関連資料群について若干の整理を行うとともに同時代資料などを紹介して油屋熊八の功績について見ていくことにしたい。

二　油屋熊八を知るための基礎資料

明治末に別府を訪れ大正から昭和初期にかけて活躍した油屋熊八は、昭和十年（一九三五）三月二十七日に七十三歳でその生涯を閉じた。四月六日に別府市公会堂にて葬儀が行われ、その際に参列者に配布されたのが『油屋熊八翁略歴』である。油屋熊八に関する公式の経歴というものであり、まずはこの資料を紹介しつつその人生を振り返りたい。

油屋熊八は、文久三年（一八六三）七月十六日に現在の愛媛県宇和島市で米穀問屋業を営んでいた油屋正輔の長男として生まれ、明治二十二年（一八八九）に二十七歳にして町会議員となる。輸出税全廃運動や同志と協力して新聞を創刊するなどの活動を行っていた。明治二十五年（一八九二）に大阪に出て、株式相場で莫大な富を得て油屋将軍と呼ばれるも失敗し、再生の機会を新天地に求めるため明治三十年（一八九七）三十五歳の時にアメリカへ渡った。明治三十三年（一九〇〇）帰国に先立ちサンフランシスコに滞在中、三谷牧師より受洗しキリスト教に帰依する。明治四十四年（一九二）十月一日に「旅人を懇ろにせよ」という聖句を体現するため亀の井旅館を開業し、その後は業務を拡張し亀の井ホテルと改名、日本ホテル協会に加わる。昭和四年（一九二九）春には米国太

平洋ホテル協会の招待を受け、日本ホテル協会を代表して再びアメリカに渡航し、別府温泉の宣伝をして帰国。別府の発展に尽くし、大分・熊本・長崎三県を連結する国際遊覧幹線を主唱、県下への企業誘致、由布院の開発、ゴルフ場の建設、飛行思想の普及、サービスの改善、亀の井自動車会社の設立と解説付遊覧バスの運行を開始した。勤労主義を吹聴し、昭和六年（一九三一）には、掌（てのひら）の大きさを競う全国大掌大会を開催した。

以上が『油屋熊八翁略歴』に記されている主な経歴である。

油屋熊八翁略歴

翁は油屋正輔氏の長男、文久三年十月十六日を以て、愛媛縣宇和島市旗新町に生る。幼にして学小早式教育を受け、又私塾に學ぶ。十五歳より家業の米穀問屋業に勤勞し、風に精勤者の称れを得せり。

明治二十二年（二十七歳）、米穀貿易調査のため朝鮮に渡る、悉くに風雨を凌ぎて鎌倉市町村制の實施せらるゝや、選ばれて初期の町會議員と成る。それより西界に殖産に著然出負を賜はし、或は輸出穀桑産業に其の目的を達し、或は同志と協力して慈善関係を創刊するなど、公共の爲に盡したること甚だ多し。

大 魚は小魚に雑まず、明治二十五年（二十歳）、翁は海南の一角より本籍を大阪に移し、本店を北浜に、支店を東京に設け、寄々株式賣買の業に活躍する奇才縦横の商略中し、忽ちにして海運の重鎮と仰がれ、東西市場に油屋商軍の名を恣にせり。

越 ゑて明治二十八年（翁三歳）、五萬の富を誇り尋て名歴更に隆々たるものありしも、寒志と謀り渝年にして一敗地に倒るゝや、若かず更生の機會を新天地に求めんには、

明治三十年（翁三歳）、非手笠撃の機、勃然として太平洋を横断しアメリカに渡航した。

渡 米以來、化はカナダより南はメキシコに至るまで、隨所に都邑を歴訪し、文物の眞相を究めて帰国し翁はあり、明治三十三年（三十八歳）隠居に先立ち、ヴンクレンスコに滞在中、三谷氏婦より生活して茫然教に入り、他賀の富より一轉して、精神の富を生涯の目標と改め、益々心機の轉換を見るに至れり。

期 くてアメリカより同朝の後は、大阪及び東京に在ること約十年。深思熟慮の末、理想實現の適地は世界的温泉地たる別府に在りと定め、「鶴八」を魅力にせよ」との聖句を體し、赤裸々の身を以て蕩竭たる鑑の井旅館を別府に開業する。時に明治四十四年（四十九歳）、十月一日なりし也。

開業当初經營、勤勞精勤日も亦足らず。後次業務を拡張し設備を改善し、名を亀の井ホテルと改めて日本ホテル協會に加はり、組織を株式會社として敢然設立と成る。調みれば翁が同好に優を占めつゝより往往を経るまで、内は事業の爲に外は別府の爲に、間断なる組織を敢行したること、實に二十有五年間。北の四昭和四年の春、米國実平洋汽船アメリカ協會の招待を受け日本ホテル協會を代表して再びアメリカに渡航し、往路を進たるの傍ら、別府温泉の宣伝に努めて帰りたるは、人の記憶に新たなる處也。

専 心一意別府の発展に盡したる翁の活動は、周知の事なるべしと雖も、風に大分・熊本・長崎の三縣を連結する國際遊覧幹線を主唱、或は天下の知己に勤説して駅下の求業誘致に邁往し、其の他由布院の開發、ゴルフ場の建設、航空思想の普及、サービスの改善、海の亀の井自動車會社の設立と解説附遊覧バスの開始に至る迄、翁の残したる功績は悉げて数かならず。

老 ひて益々盛んなり翁は、自ら稱するに青年を以てし、東奔西走旅馬まるに忙あらずと、ことに某の齢七十三歳の年頃に誌したる、翁の手記中「今年の計画」と題して、一句に曰く「謹賀新年牧場の眞現、二に由のホテルの創設、三に亀の井自動の開拓とあり、之れの期待未だ實現を見るに至らず、而して翁今や亡し。

終 始一貫、勤勞主義の實行者たりし翁は、又其の賛吹者なりし也。衆に優れて常の大なるは、少年時代勤勞の結果なりと信じ、書では開業二十周年に書り、全國大掌大会を主催し、近くは其の大掌を得捧したる色紙を世に頒布するなど、盛んに勤勞主義の賛吹に努めたるものなり。宜なる哉翁が愛誦の聖句に、「神は今に至るまで働き給よ、吾も亦働く也」の一節あり。

鈴裕時々、無欲恬惨、こだはり無くして又ユーモアに富み、然も準に似て大勝軍氏、悪態決行の勇敢たりし也。故士屋太郎、舊て翁を友人に紹介して、「百萬金を儲り百萬金を失よて平然たる男」と。永田前東京市長は翁に宗すに、「春めく春ネクタイの温泉の挙主」の句を以てしし。中根三和銀行頭取の評に曰く「翁行の、頭取の肝を淡すか豊八」の一言あり。何れも翁が性格の片鱗を語るも亀。

翁 は鼎はすして文と雲を捲くし、律句に長じ又漁獲あり、人其の才に驚やざるは無し、今此の病快なる天才的傑物を亡ス、惜むべき哉。

昭和十年四月六日

なおこの略歴には、油屋熊八の伝記に時折見られる米相場師としての活躍や富士山に「山は富士、海は瀬戸内、湯は別府」の標柱を建てる話などが記されていないことは注目される。

三　油屋熊八関連資料の分類

油屋熊八に関する資料は数多く存在するが、簡単に分類すると以下のようになる。

（1）油屋熊八自身が携わった資料
熊八が記した文章（手記・寄稿文・手紙・大手形色紙・俳句）、熊八が写った写真、熊八が掲載した新聞広告

（2）同時代資料（文久二年～昭和十年）
新聞記事、図書・雑誌記事、官公庁の記録、他者の執筆による日記・随筆及び俳句・絵画、梅田家資料

（3）油屋熊八の没後に知人により記された資料
油屋熊八とともに観光宣伝活動を行っていた人物の手記（宇都宮則綱一九六五・原北陽一九八一など）
知人による伝記・手記（兼子鎮雄一九五二など）
油屋熊八氏を偲ぶ座談会（一九五〇）などの証言

（4）後世に油屋熊八の業績をまとめた資料
伝記・論考・小説（是永勉一九六六・志多摩一夫

一九七九・安部巌一九八〇・佐賀忠男一九八四・村上秀夫一九九八・小野弘二〇一〇ほか・岩藤みのる一九九九・堀田譲二〇〇二ほか・三重野勝人二〇〇四・外山健一二〇〇九ほか・松田法子二〇一二）など

油屋熊八の功績を深く知るためには、（1）油屋熊八自身が携わった資料、（2）同時代資料（文久三年～昭和十年）を丹念に探索し事実を押さえていく必要があり、以下では本人が記した資料や同時代資料を紹介して若干の検討を加えたい。

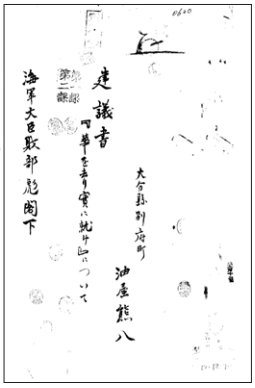
四　油屋熊八関連資料の紹介

（1）油屋熊八自身が携わった資料

◇関東大震災を受けて油屋熊八が記した建議書

【建議書　『華を去り実に就け』について】

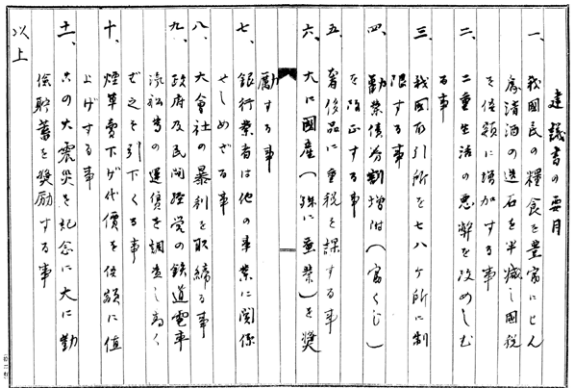
大正十二年（一九二三）十一月三十日付で海軍大臣財部彪に提出した建議書が存在する。表紙には「大分縣別府町油屋熊八　建議書『華を去り実に就け』について　海軍大臣財部彪閣下」とある。この建議書が提出される三か月前の九月一日に関東大震災が発生し、死者行方不明者十万五千人という未曽有の大災害が起きてる。「華を去り実に就け」とは、「見かけをはでに飾ることをやめて、質実な態度をとる」という意味であり、震災直後に発せられた大正天皇の詔の趣旨を徹底するための山本首相の告諭にも使われており、国民に浸透した言葉でもあった。熊八はこの大災害を契機に自身が日本の弊害と考える事柄について改めるよう政府へ提言している。


建議書
華を去り実に就け
大分縣別府町
油屋熊八
海軍大臣財部彪閣下

▶建議書の表紙

この建議書は原稿用紙二十四枚にもわたるもので提出先である海軍大臣財部彪は、震災直後組閣された山本権兵衛内閣において海軍大臣となり、度々別府へ訪れ亀の井に宿泊しており旧知の仲であった。

建議書の要旨として次の十一項目を挙げている。


建議書の要旨
一、我国民の糧食を豊富にし
為清酒の造石を半減し国税
を低額に堪かする事
二、二重生活の悪弊を改めしむ
る事
三、我国布引所を七八ヶ所に制
限する事
四、勧業債券割増賞（宮くじ）
を廃止する事
五、奢侈品に重税を課する事
六、大に国産（殊に重業）を奨
励する事
七、銘酒業者は他の事業に関係
せしめざる事
八、大会社の暴利を取締る事
九、政府及民間所受の鉄道電車
汽船等の運賃を調整し為く
む之を引下くる事
十、煙草専売代償を低額に値
上げする事
十一、此の大震災を記念に大に勤
倹貯蓄を奨励する事
以上

▶建議書の要旨

一、我国民の糧食を豊富にせん為清酒の送石を半減し国税を倍額に増加する事
二、二重生活の悪癖を改めしむる事
三、我国取引所を七八ヶ所に制限する事
四、勧業債券割増附（宝くじ）を改正する事
五、贅沢品に重税を課する事
六、大に国産（殊日に蚕業）を奨励する事
七、銀行業者は他の事業に関係せしめざる事
八、大会社の暴利を取締る事
九、政府及民間経営の鉄道電車汽船等の運賃を調査し高くば之を引下くる事
十、煙草売下げ代価を倍増に値上げする事
十一、この大震災を記念に大に謹倹貯蓄を奨励する事

各項目について詳細に語られており、自身が徹底した禁酒に関する事柄や旅館業とも関連する交通機関の値下げに関することについても触れられている。また、青年期に大阪株式取引所の株式をして巨万の富を築いた株式取引についても「全国の取引所（実は公然の博奕場）左記の都市七ヶ所に断然制限すること」とし、東京・横浜・名古屋・京都・大阪・神戸・下関に制限し、会員制にして資産と信用と人格があるものに限ることとし「拙者も郷里宇和島で親譲りの実業も家も〇も〇〇〇身代限り北浜市場に献上せし実は一人で間違のない生きた証人である」と綴っている。なお、北浜市場とは大阪株式取引所のことであり、「身代限り」＝財産の限りを献上したと自身の体験を述べている。

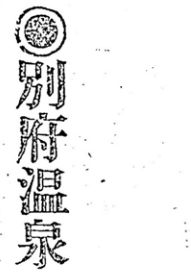
◇新聞広告を使った別府温泉の宣伝

油屋熊八は宣伝方法として新聞広告を活用している。基本的には自らが経営する旅館の宣伝であるが、そこに記されている記事にはその時々の熊八の考え方をうかがい知ることができる。

『大正五年十一月十九日付　東京朝日新聞広告』

「別府温泉　▲別府温泉を知らぬ人は恐らく温泉を語る資格なし▲気候の温暖なること実に熱海以上なり▲風光は瀬戸内海を前に控え後に由布鶴見の火山あり北は天下の耶馬渓に隣して其雄大云はん方なし▲大阪より船せば其行程一昼夜盥の如き海上に瀬戸内海の景色を恣にし千四百頓大の最新式紅丸は別府浴客快楽の為に往復せり▲東京駅午前八時の特急列車に乗車せらるれば車中一泊翌朝瀬戸内海を左に見つつ午後三時には別府霊泉に親めり▲旅館は約二百軒あり軽便の自炊

式あり旅籠式ありいづれも清潔を旨とせり　旅館亀の井　油屋熊八」



この広告が掲載された大正五年（一九一六）は、亀の井を創業して五年程度経過し、旅館経営は軌道にのりつつあるものの流川通りが旅館の前を通るか通らないかの時期である。

広告の最後に旅館の名前を載せる以外はすべて別府温泉の宣伝に費やしており、旅館は二百軒ありいづれも清潔を旨としているなど、別府温泉の旅館設備が整っていることを紹介している。

◇大阪商船への要望

『大正九年三月一日付　東京朝日新聞広告』

「大阪商船は瀬戸内海交通に貢献する處多し、併し欧米では飛行機が船の代用をしつつある世の中世界有名のパノラマたる瀬戸内海に僅々一時間十浬の徐行たる紅丸が急行船で御座るとは五大強国の我帝国聊か以て心元なし我等は大阪商船に此際一層奮発を懇望するや實に切なり」

交通の重要性を説いており、欧米における飛行機の利用まで持ち出して、大阪商船に対して叱咤激励をしている。なお、大阪商船は翌年の大正十年（一九二一）に紫丸を竣成させ、熊八はこの時の喜びを扇に記し知人に配布している。

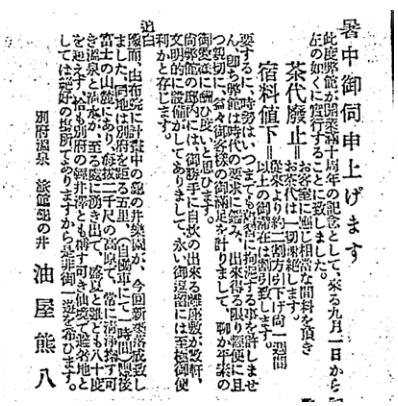
◇茶代の廃止

『大正十一年八月十九日付　東京朝日新聞広告』

「暑中御伺申上げます　此度弊館が開業満十周年の記念として、来る九月一日から左の如くに実行することに致しました。　茶代廃止＝お客室に応じ相当な間料を頂きお茶代は一

切謝絶します。　宿料値下＝従来より約二割方引下げ尚一週間以上の御滞在は割引致します。」

茶代とは、宿泊料金や従業員に渡す心付けとは別に、旅館に対して支払う金銭のことで（富田二〇〇三）、当時としては一般的に支払われるものであり、宿泊者を煩わせ、時には不愉快な思いをさせるものであった。茶代は宿泊業者としても大きな収入の一つでもあったが、旅館のサービス改善を考える熊八は、宿泊客を不快させる茶代をいち早く廃止し、宿泊料金を明確にした。


暑中御伺申上げます
此度旅館が開業滿十周年の記念として、來る九月一日から
左の如く實行することに致しました。
茶代廢止＝お客様に逸じ相當な間料を貰き
お茶代は一切廢止します。
宿料値下＝以上の御滞在は割引致します。
從來より約二割方引下げ尚一週間
以上の御滞在は割引致します。
變するに、時勢は、つまり客様に拘泥する事を許しませ
ん即ち、常に客様は時代の要求に答へ、出來得る限り便に且
つ親切に、各々旅の御滞足を計りまして、即ち平素の
御愛顧に感ひ、と申ひます。
尚旅館内には、御勝手に自炊の出來る設備が改新、
文明に設備致しましてありまして、永い御逗留には至極御便
利と存じます。
別府温泉　鉄輪温泉の井　油屋熊八

（2）同時代資料

油屋熊八はその生涯を通じて様々な活動を行い、当時の新聞や雑誌などにも取り上げられ紹介されている。また、多くの文化人や政財界人とも交流を持ち、その人物の日記や手記などの記録に登場している。これら同時代資料も熊八を深く知る上では重要な資料となる。

◇宇和島時代の活動

『明治二十四年五月一日付　東京朝日新聞』

「輸出税全廃の建議　宇和島実業青年倶楽部にては神森眞一、油屋熊八の両氏を総代として上京せしめ一昨日輸出税全廃の建白書を大蔵大臣へ提出せし由又右の両氏は上京の途次大阪及び静岡の商法会議所及び実業者を訪問して意見を叩きたるに何れも両氏の説に賛成を表し同じく建白書を其筋へ提出するとを約したりと」

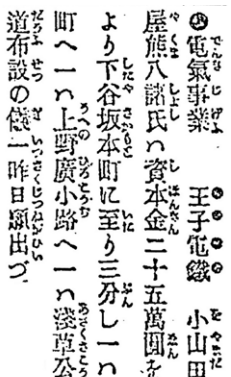
この記事は明治二十五年（一八九二）に三十歳で大阪へ進出する前年のものであり、熊八は宇和島実業青年倶楽部に所属し、そこで取りまとめた輸出税全廃の建議書を大蔵大臣に提出し、その途中の大阪や静岡において演説をして賛意を取

り付けたと記事にある。青年期から活発な行動をしていたことがよくわかる記事である。

◇東京での活動

『明治二十九年十月三十一日付　東京朝日新聞』

「電気事業　王子電鐵　小山田信蔵河村隆実油屋熊八諸氏は資本金二十五萬圓を以て府下王子村より下谷坂本町に至り三分し一は金杉通り南千住町へ一は上野広小路へ一は浅草公園に至る電気鉄道布設の儀一昨日願出づ」


電氣事業　王子電鐵　小山田信蔵河村隆實油屋熊八諸氏ハ資本金二十五萬圓を以て府下王子村より下谷坂本町に至り三分し一ハ金杉通り南千住町へ一ハ上野廣小路へ一ハ淺草公園に至る電氣鐵道布設の儀一昨日願出づ

電鉄事業について進出を目論んでいたことを示す記事である。この電鉄事業がその後どのような経緯を辿ったか不明であるが、現在の台東区上野付近で電鉄事業を計画していたことが判る。熊八はこの頃、大阪の邸宅とは別に、電鉄事業を計画していた場所の近く（現在の日暮里駅付近）に住居を構え東京での拠点としていた。熊八の住居から数軒隣にある羽二重団子を好物にしていたという証言もある（澤野一九九九）。隣町は根岸であり、この当時俳句や短歌に新風を吹き込んでいた正岡子規の邸宅（子規庵）は徒歩数分の距離にあった。子規の他にも付近には多くの文化人も住んでいる場所でもあった。

◇財界人との交流

『竜門雑誌第九十号（明治二十八年十一月』

「竜門社にては、去月十七日午後一時より日本橋浜町一丁目日本橋倶楽部に於て第十五回総集会を開かれたり（中略）油屋熊八君（後略）」

明治二十八年十月十七日に開催された竜門社総集会の記録である。竜門社とは渋沢栄一を慕って渋沢邸に寄寓していた書生たちが始めた勉強会が起源となり、現在の公益財団法人渋沢栄一記念財団につながる団体である。この時の総集会では、渋沢栄一・徳富猪一郎（蘇峰）・尾高惇忠らの演説が催され、夕方からは庭園での園遊会、夜は中国料理の晩餐などが行われた。政財界や文化人らが招かれており、このような中で様々な人物を知り交流を持っていたことをうかがい知ることができる。この交流はのちに別府で旅館業を開業してのち、特に

創業時に生かされており渋沢栄一は、熊八が別府で旅館業を開業して間もない大正三年（一九一四）六月六日に別府を訪れ亀の井に宿泊しており、亀ノ井は名士も泊まる旅館として定評が高まり、飛躍的に発展する要因にもなったものと考えられる。なお、熊八は明治二十九年九月二十日開催の第十七回秋季総会にも参加をしている。

◇大阪株式取引所仲買人時代

『大阪株式取引所沿革及統計書　自明治十一年　至明治三十四年』

大阪株式取引所の沿革に油屋熊八の株式仲買人時代の開廃業年月日が記載されている。

開業年月日　明治二十六年七月一日

廃業年月日　明治三十年九月二十七日

氏名　油屋熊八

開業年月日	廃業年月日	姓名
明治廿六年二月七日	明治卅三年二月十七日	高瀬幸次郎
同　年六月二十一日	明治廿六年九月三十日	山田岩吉
同　年七月一日	明治三十年九月二十七日	油屋熊八
同　年七月二十五日		竹原友三郎

この資料では大阪株式取引所仲買人としての開業及び廃業の時期が判る資料である。

◇大正時代の油屋熊八

市島春城『双魚堂日誌』（大正四年）

「四時二十分、博多を発し小倉ニ至る。此間急行小倉より分岐して別府ニ赴むく途次、中津を過ぎ耶馬渓山を遥かに見る。九時十分別府ニ着。同行坪谷水哉也。亀の井ニ投す。此家の主人油屋熊八、東京にありし頃の相識也。」

市島謙吉（春城）は、衆議院議員、早稲田大学初代図書館長を務めた人物で、熊本で行われた全国図書館協会全国大会からの帰路、大正四年（一九一五）五月六日に別府を訪れた際の日記である。「此家の主人油屋熊八、東京にありし頃の相識也」とあり、油屋熊八が東京にも拠点を置いていた頃の知人であったことが分かる。

◇高崎山の別荘計画

千葉江東『西の旅の印象』（大正四年）

「（高崎山）亀の井主人此の山頂に十万坪の土地を買占めて、

近く大別荘を起さんとして居る。名は聴猿閣」

千葉亀雄（江東）は、評論家・ジャーナリストとして活躍。時事新報記者時代の大正四年（一九一五）に東京記者団の一員として別府を訪れている。

油屋熊八が高崎山の土地を所有していたことは、兼子鎮雄により紹介されており、高崎山の土地は財政的に窮地となった時に手放しており「その金全部は債主の為に取りあげられ油屋翁の手には一銭の金もはいらなかった、この時は流石の翁も男泣きに泣いた」（兼子鎮一九五二）と伝えられ、高崎山の別荘計画は頓挫したことがわかる。

『実業之世界　三月号』（大正十年）

大正十年に発行された『実業之世界　三月号』には「別府名物　亀の井　油屋熊八君」として特集が組まれている。この『実業之世界』は渋沢栄一なども寄稿している全国誌で、実業家油屋熊八の活躍が紹介されている。

「別府に、温泉、羊羹、温泉染、等もとより名物が多いが最大の名物は、恐らく旅館亀の井の主人油屋熊八君である。別府の停車場へ下りる人、別府の波止場へ下りる人は、洋服姿のいかめしい駆幹偉大な、禿頭の老人が多勢の番頭を指揮して、客を送迎するのを見る。その禿頭氏が即ちわが油屋熊八君である。（中略）初は四間か五間の自炊宿であったが、僅か十年にして、徳川頼倫候、渋澤子、久原房之助氏等を初め東西名士を定客とし、別府の名家日名子旅館と相並んで一流の旅館となるに至った。亀の井と名づけたのは、一つは不老町に在って、不老泉と同質の温泉が湧くので鶴は千年、亀は萬年に因んだのが一つ、油屋では、大阪辺の債鬼が襲来する恐れがあるのが一つ、大阪での失敗したのが脱兎的活躍に因して居たのに鑑みて亀の歩みの遅きを学ばんとしたのが一つ。併し、此の亀は案外早く、少なくとも別府一流の旅館と

別府名物
井の亀
油屋熊八君

▶『実業之世界　三月号』（大正十年）

云う目標までは駈け着いたが、此の亀の理想はもつと大きい所にある。昨年大分縣で大演習が行われた時、外国武官の多数は、別府に宿泊したが、別府には戦時中不景気で休業して居った別府ホテルが一軒あるだけであった。油屋君は、大いに発奮して十六人の外国武官を引受けた。そして東京の精養軒から腕利きのコック七八人と洋風装飾、食料品一切を貨車二台分とを借り込んで、十六人悉皆に満足であったと言わせた、此の禮を聞いたばかりに、油屋君は約二千圓損をしたが、是れが世界に対する別府の広告料だと思えば安いものですと云ったと云う。けれども、其の別府にホテルらしいホテルが一つもないと云うのは別府の名折れだと考えた油屋君はここに、別府南埋立地、朝見山を負ひ、豊後湾を控て三歩にして海へはいれる地点へ亀の井ホテルの敷地とトし、資本金百萬圓の株式会社を起こさんとして、頻りに奔走して居る。」

大正十年（一九二一）頃の油屋熊八の活躍が分かる資料である。別府駅頭や別府港における観光客の受け入れに奔走する姿や外国武官を受け入れた際に日本における西洋料理の草分けである東京の精養軒からコックを招き、食器や食材などを持ち込んでもてなし、赤字も世界に向けた別府の広告料とらえていた。また、ホテル構想があったことも紹介され、このころすでに海外からの観光客の受け入れについて考えていたことも判る資料である。

◇富士山の宣伝標

富士山頂に「山は富士、海は瀬戸内、湯は別府」の標柱を梅田凡平に託して設置したとされる有名なエピソードを当時の新聞記事から見ていきたい。

『大正十四年六月二十七日付け大分新聞』

「夏の富士登山　別府発展祈願

別府市の日本旅行文化協会支部主催にて今夏富士登山団を募集して居るが『別府大発展祈願の為め』という触込みで既に学生、婦人等数名の申込みがある一行は七月十七日むらさき丸にて出発十八日朝神戸より急行御殿場一泊十九日早朝登山七合目一泊、二十日午前三時頂上にて遥拝、午後御殿場にて解散することになつて居る會費二十七圓、申込は五圓を添へて不老町梅田凡平氏方へ

夏の富士登山

別府發展祈願

別府市の日本旅行文化協會支部主催にて今夏富士登山團を募集して居るが『別府大發展祈願の爲め』といふ觸込みで既に學生、婦人等數名の申込みがある一行は七月十七日むらさき丸にて出發十八日朝神戸より急行御殿場一泊十九日早朝登山七合目一泊、二十日午前三時頂上にて遥拜、午後御殿場にて解散することになつて居る會費二十七圓、申込は五圓を添へて不老町梅田凡平氏方へ

参光、午後御殿場にて解散することになって居る会費二十七円、申込は五円を添へて不老町梅田凡平方へ」

　この記事では日本旅行文化協会支部の主催で富士登山団の募集をしていることが記されている。会費は二十七円で、梅田凡平方へ五円を添えて申し込むことになっている。

『大正十四年七月十五日付け大分新聞』

「別府市制記念の富士登山　山頂に宣伝標　別府お伽倶楽部主催の市制一周年記念富士登山会は入会者が多く既に三四十名に達し出発の十七日までには更に相当参加する見込みだが市当局では此機会に富士山山上に別府の宣伝をする為め表面に『山は富士、海は瀬戸内、湯は別府』と大書し裏に『別府市役所温泉課』と記した八寸角二間の棒杭を建てることになった」

別府市制記念の富士登山
山頂に宣傳標
別府お伽倶樂部主催の市制一週年記念富士登山會は入會者が多く旣に三四十名に達し出發の十七日までには更に相當參加する見込みだが市當局では此機會に富士山上に別府の宣傳をする爲め表面に「山は富士、海は瀬戸内、湯は別府」と大書し裏に「別府市役所溫泉課」と記した八寸角二間の標杭を建てることになつた

　この記事では、主催が別府お伽倶楽部となっている。お伽倶楽部とは、久留島武彦が始めた口演童話を中心とする児童文化運動である。別府では梅田凡平が中心となって全国のお伽倶楽部と連携して活動を行っていた。記事では市当局が別府の宣伝のため「山は富士、海は瀬戸内、湯は別府」の八寸角（約二十四cm角）二間（約三m三十六cm）の標柱を建てることになったと記している。

『大正十四年七月二十五日付け大分新聞』

「別府の富士登山隊　石室で余興や演説会開催　一丈餘の記念建設　去る十七日別府を出発した別府市の富士登山隊一行二十二名は神戸経由十八日夜御殿場に到着同地に一泊し翌十九日午前四時浅間神社に参拝し登山の安全を祈念して直ちに出発、乗馬で太郎坊に至り同地から一部は徒歩により一部は尚ほ騎馬を続けて五合目に至りその夜は七合八合目において一泊し石室におい

別府の富士登山隊
石室で餘興や演説會開催
一丈餘の記念建設
去る十七日別府を出發した別府市の富士登山隊一行二十二名は神戸經由十八日夜御殿場に到着同地に一泊し翌十九日午前四時淺間神社に參拜し登山の安全を祈念して直ちに出發、乘馬で太郎坊に至り同地から一部は徒歩により一部は尚ほ騎馬を續けて五合目に至りその夜は七合八合目において一泊し石室において種々の餘興や演説會を催し頂上には一丈の「山は富士海は瀬戸内温泉は別府」の記念標を立て二十日午前五時から出發八合目において御來光を拜し絶頂に達したのは午前九時であつたが其所において記念の温泉宣傳のビラを散布して演説會を催したそれより一同は下山の途につき砂走りを快走して午後四時御殿場を經て箱根、小田原を觀察し一同東京に入つた(廿一日東京)一行のうちには婦人三人あり何れも元氣である

て種々の余興や演説会を催し室前には一丈の『山は富士　海は瀬戸内　温泉は別府』の記念標を立て二十日午前五時から出発八合目において御来光を拝し絶頂に達したのは午前九時であったが其所において記念の温泉宣伝のビラを散布して演説会を催したそれより一山の途につき砂走りを快走して午後四時御殿場を経て箱根、小田原を視察し一同東京に入った（廿一日東京）一行のうちには婦人三人あり何れも元気である」

この記事では富士登山隊の行動が詳細に記されている。富士登山隊二十二名は大正十四年（一九二五）七月十七日に船で別府を出港し、神戸を経由して七月十八日の夜に富士山の麓の御殿場に到着して一泊、七月十九日早朝から登山を始め七合八合目にある石室（宿泊施設）にて一泊することになるが、この石室前で各種の余興や演説会などを行い「山は富士、海は瀬戸内、温泉は別府」の大標柱を設置している。標柱を設置した翌日の七月二十日も早朝から山頂を目指して登山を開始、午前九時に山頂に達し、温泉宣伝のビラの散布や演説会などを催している。

以上が、新聞記事に見ることができる富士山に大標柱を建てた一部始終であるが、その主体は梅田凡平であったことがよくわかる。この資料だけでは熊八の関与は不明であるが、熊八と凡平とはともに別府宣伝に没頭する盟友関係にあり、日常的に観光宣伝の意見交換がなされていたことも考えられる。なお、記事では市当局が「山は富士、海は瀬戸内、温泉は別府」の標柱を建てることに決めたとしているが、この「山は富士・・」のキャッチフレーズ自体は、富士登山の一年前にあたる大正十三年（一九二四）八月に梅田凡平により発行された鳥観図の中に記載されており、鳥観図を作成した吉田初三郎による「絵に添へて一筆」に「見よ、東九州第一の都会として、風光明媚限りなき此の天下のパラダイスを・・・「山は富士、海は瀬戸内、温泉は別府」」として登場しており、少なくとも富士山頂付近に大標柱が建てられる一年前までには、熊八や凡平の周辺では認知されていたキャッチコピーであったことがうかがえる。

五　おわりに

本稿では、油屋熊八本人が携わった資料や同時代資料などを紹介した。本人資料も同時代資料も書かれていること全てが事実であるとは云えない。一つの資料ととらえて慎重に検討する必要があり、これらの資料を積み重ねることによって

歴史的な事実に近づくものと考えられる。

油屋熊八は別府観光の発展のために尽くしたことは今回紹介した資料のなかでもうかがい知ることができた。また、宇和島時代の輸出税全廃建議書にみられる行動力や東京での政財界人との交流も垣間見ることができ、このような資料はまだ多く存在しているものと思われる。別府のみならず大分・九州の広域圏観光の先駆けとなった油屋熊八に関しては、人物研究の対象に成りえるものと考えられ、近代日本の観光発展史に位置づけてとらえる必要がある。そのためにもさらなる資料の探索と検討が今後の課題となってくる。

【引用・参考文献】

一九〇三『大阪株式取引所沿革及統計書』大阪株式取引所

市島春城一九一五『双魚堂日誌』

千葉江東一九一五『西の旅の印象』

一九二一「別府名物亀の井油屋熊八君」『実業之世界三月号』

油屋熊八一九二三「建議書　御聖旨『華を去り實に就け』について」

一九三五『油屋熊八翁略歴』（村上秀夫一九九八集録）

一九五〇「油屋熊八翁をしのぶ座談会」『二豊の文化第4巻第9号』

兼子鎮雄　一九五二『観光別府の先覚者　油屋熊八翁』別府市立図書館

宇都宮則綱　一九六五『回顧七十年』

是永勉　一九六六『別府今昔』大分合同新聞社

兼子俊一　一九七〇「油屋熊八」『大分県の先覚者』

志多摩一夫　一九七九『別府開発の偉人　油屋熊八』

安部巌　一九八〇『ふるさとの思い出写真集　明治・大正・昭和　別府』

原北陽〔述〕田辺真民〔著〕一九八一『語部』

佐賀忠男　一九八四「湯けむり大平記　油屋熊八物語」西日本新聞

一九九二「油屋熊八と別府」『BAHAN　No.10』

村上秀夫　一九九八『アイデアに生きる小説油屋熊八　パート2』

岩藤みのる　一九九九『蘇れ！！熊八たち』

澤野庄五郎　一九九九「だんご寄席　上根岸町近傍図（其の二）」

https://www.habutae.jp/event/talk/talk3.php

堀田穣　二〇〇二「油屋熊八伝説を疑う」『人間文化研究第9号』

堀田穣　二〇〇三「油屋熊八伝説の生成」『人間文化研究第10号』

富田昭次　二〇〇三『ホテルと日本近代』青弓社

三重野勝人　二〇〇四「油屋熊八の実像を探る」『別府史談第18号』

堀田穣　二〇〇六「油屋熊八・梅田凡平・お伽船」『別府史談第19号』

外山健　二〇〇九『温泉マーク由来記』

小野弘二〇一〇「懐かしの別府ものがたりNo1046」ほか今日新聞

松田法子二〇一二『絵はがきの別府』